社会科のための郷土史講座

上古の大分県

賀川光夫

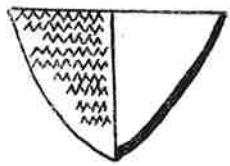
先史時代

日本で最も古い時代の日本各遺跡想像図

先史時代と云うのは、たよるべき文献的資料の存在しない時代であり、土器や石器によつて当時の文化を追求しようとするものである。もつとわかり易く云えば、大和地方に天皇家を中心とする国家の成立によつて、出現した古墳文化以前を指すものである。従つて普通縄文式時代、及び彌生式時代と称している時代が即ち先史時代である。この素朴未開の原始時代に大分県は如何なる文化を有していたであろうか。

一　尖底の文化

豊後水道に未だ海水が充分に進入していなかつた頃、① 現在の国東半島や、九州山脈の東麓等にわが祖先の営みがはじめられた。こんな大昔のことを知るために手掛りとなるのは、永年土中にあつても腐蝕しない土器や石器による外はない。この頃の土器は押型文土器と云い、粘土の紐を口の部分から巻き上げ乍ら作成した深い鉢形の土器で、巻きじまいが尖る特徴をもつている。器面はその未熟さを調整するために、棒状の工具をローラとして調えて居る。この棒には、山形や円形の文様を刻み込んであり、これを施文原体として器面を調整すると、山型連続文や、連続円文等が押捺されるのである。



尖底　押型文土器

早水台式土器

この尖底の土器類と共に、機能の単純な、用途の未分化の石器類が発見される。この石器は自然石の一端を打ち欠いで作つた先の尖つたもの、又は打欠いて得た剥片の周囲を剥取りによつて製形したもの等で、定的型なものは石鏃があるばかりである。この石鏃は長二等辺三角形をしたものや、鍬型石鏃と称して基部の凹穀するもの等、他の時期に例のないものである。

このような素朴な土器や石器は、関東以南の日本各地に発見されているが、概ね小さな規模の範囲を、ほんの少量の破片が存在しているに過ぎない。したがつてこの土器、石器を成作又は使用した人々は極めて少人数で、短かい期間一ケ所に生活する漂泊的生活をしていたと考えられていた。ところが大分県速見郡日出町（旧川崎村）早水台遺跡では数百坪にわたる広大な地域に尖底の土器が散布し、長く定着生活をした家の址が発見された。この家の址は柱穴の配置によつて復原すれば、柱を四方に立て、切妻造りの屋根を葺き、棟先を受ける棟持柱を使つて秋から春先まで強い北西風を受ける西側の棟を低くしていたと推定出来る。柱穴の大きいのは三〇糎を超えるものもあり、柱の太さも推定されるから、屋根は相当高く、長い期間の生活に堪えられるものであつたと考えられる。このような家の建築材料を遠方から求めることは困難であると思われるから、当時の早水台は樹林と草地に掩われたところであつたろうと考えられる。したがつて鹿や猪などの獣類もこの台地近くに出没していたことであろう。人々はこれらの獣類を獲り、更に樹間に木の実を集めて食糧にしていたであろう。このように自然環境に恵まれたことによるものであろうが、早水台は長期間にわたつて人々の生活の場所であつたことが知られた。

他にもう一つ略々同時代の遺跡として、臼杵市（旧北海部郡上北津留村）末広小六洞窟がある。これは極く小規模で短期間の漂泊性を物語る遺物が少量洞窟内より発見されて居り、早水台とは良い対象となつている。このような遠い昔の営みの跡は、この他にも大分県の各地に存在している。一片の尖底の土器と打ち欠きによる尖頭石器から太古の大分県をさぐることも故なきことではないと考える。

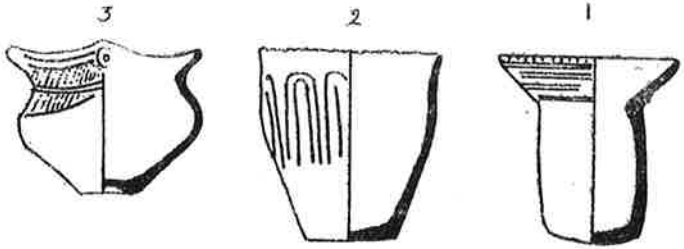
二　縄文式時代

尖底の土器を使用した時代が終りをつげ、大野川や大分川が、沿岸に葦や雑草が生い茂つて不気味に流れ、日田や竹田盆地が大森林におおわれていた頃、自然は獣類の巣であつた。古事記の中にも「人々は毎日、へびや、むかで、しらみ等の為め安眠出来なかつた。」と書いてある。こんな自然の中にあつて人々は着々と文化の基礎を作つて行つた。山林原野は狩りの場所となり、河、湖水、海は魚類、貝類の採集場所となり、山の幸、海の幸を追い乍ら共同の社会を築いて行つた。

現在、丘や森の中に貝類の散布している場所がある。これを調べて見ると貝類、魚骨を始め、獣骨等が掘り出される。これはすべて当時の人達の食膳に供せられた食物の残骸である。又こうした場所から沢山の土器片や、石器等が発見される。これら土器、石器の人工遺物を包含する貝類等の自然遺物の堆積する場所が貝塚であり、これこそ当時の人達の村の

跡である。

この貝塚の中、豊後高田市近郊の森貝塚は古くから考古学者の注目するところとなり、数回にわたつて研究のための発掘が行われた。この森貝塚形成の時代、即ち縄文式文化期は、狩猟を主体とする生活が営まれていたが、人々の生活は「腹がすいた時のみに経済生活を行う」と云う謂わば、生理的反射生活であつた。当時の文化は素朴な縄目の文様を付けた土器によつて特徴ずけられる。この時代の土器は、粘土をタガ状にしてこれを積み重ねることによつて形成したもので、主に円筒形をなしている。器面は細い箆をもつて直線や曲線を組合せた沈線文を施し、更に粘土の帯を縄目にかたどつて貼り付けたり、縄や貝殻の腹縁を押し



大分県の縄文式土器

付けたりして、種々の文様をつけている。しかし文様の主体をなすものは、撚つた糸を押し付けたり、廻転したりして施文する所謂縄文である。このように種々の文様を組み合せた文様は素晴しい構図として近代人の好みにも一致している。これらの文様を施した土器の内、主なるものを図に一括して見た。(1)は別府市東山より発見された前期縄文式土器で、朝顔状に口の開いた円筒形土器である。黒褐色の厚い器壁をしたもので、焼は比較的悪。文様は細く先の尖つた道具を使用して列点、平行沈線文を組合せたものである。この前期の縄文式土器は、大分県では現在までわずか一例を見るに過ぎないが、未だ各地に於いて発見されるはずの土器である。(2)は鶴崎市横尾貝塚、日田郡五和村大字川上遺跡等に於いて発見された数個の中期縄文式土器である。形は前期の土器に比較すると、豊かな曲線に富む深鉢形で、黒褐色のやゝ良好な焼成をなして居り、成作や窯の進歩が認められる。文様は指頭や、太い棒等で自由に直、曲線、列点等を組合せた勇渾なものである。(3)は豊後高田市森貝塚を初め別府市実相寺、春木遺跡、中津市植野貝塚等、大分県各地より発見された後期縄文式土器である。これは一段と形の変化に富み、焼成も良好で、文様にも繊細な施法が認められる。細かい棒状の工具による沈線文の間に縄文を加え、この縄文をひとつ、ひとつ擦り消して器面調整と文様とを兼ねている。この擦消し縄文は縄

文後期の文様を代表するものである。

以上の土器は何の目的に使用されたかは明確に知り得ないが、県内各地に於いて発見される住居址の炉址等には必ず数個の土器片が発見されているから、これら土器の使用は相当に広い用途を持つていたものと考える。

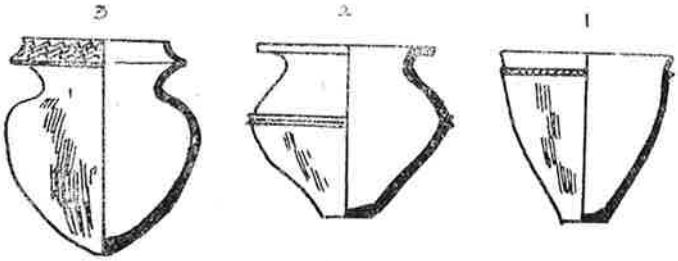
三　農業のはじまり

大自然の中に、自然のまゝに生活していた人々は、やがて農耕をともなつた新しい文化が中国大陸や韓半島を通じて、北部九州に到来したことによつて、一段と飛躍した生活をするようになつた。これは今から略々二千年位前のことである。この新来の農耕文化は更に金属器をともない、生活の一つの転換期を招来した。それは多くの人々の力を結集しなければならない農耕文化の性質によるものである。農耕によつて人々は定住の位置を求め、村落を形成した。富の蓄積によつて偏在した富裕力は社会に階級を作り、在来に原始的な国家を見るに至つた。この農耕と金属器のもたらした原始部落国家出現の時代は、我々が彌生式土器と称する素焼の土器によつて特徴づけられる彌生式時代なのである。

この彌生式土器は、縄文式土器が各個の技術によつて作られたものであるのに対して、専門の土器職人によつて製作されたと推定される如く、均斉がとれ、統一された形状をしている。これは彌生式社会のもたらす一面であろう。彌生式土器の名称は、この土器が最初に発見された、東京都文京区彌生町の名によるもので、縄文式土器のように土器自身の特徴を指摘したものではない。

さて彌生式土器は縄文式土器に比較して均斉のとれていることが特徴とされているが、中期以降に見られるロクロ使用による形成以外は概ね輪積手法によつて作法されているものが多い。しかし個々の土器には微細な変化が時代によつて認められる。遠賀川式土器②と称せられる彌生式前期の土器には比較的深鉢形の土器が多く、その口縁部には数条の沈線文を主に、櫛状の工具によつて列点文を施すなど、簡描文をなしている。大分県に於いては、この彌生式前期の土器を発見する遺跡として佐伯市南方の下城遺跡群が有名である。この前期の下城遺跡に於いて注目される土器の特徴は、口縁部に一乃至数条の隆起帯文を施し、これに刻目を施した深鉢形で、施文の上で縄文文式文化の様相に深い関係があると見なされるものである。この素朴な彌生式前期の土器を下城式土器③として標式しているが、これは大分県に於ける地方色豊かなものとして他にあまり類例を見ない。又前に述べた簡描きを施した遠賀川式土器は、臼杵市家野遺跡、豊後高田市城の原遺跡等全県下に点在しているが、其の数は極く少ない。この遠賀川式土器、下城式土器をもつて大分県の彌生式土器前期とするが、時代的には略々併行関係にあるものと推定される。こ

の前期の土器に次いで中期の土器は腹部に多少張りが現われ、その部分に一乃至二条の隆起帯を一周させている。特に口縁部は丁又は丁字形をなす場合が多く、この種の大甕の中には、二つ合わせて人体埋葬の外部施設にした甕棺がある。



大分県の弥生式土器
1,下城式土器　2,大津式土器　3,安国寺、下次式土器

この彌生式中期の遺跡として大分県では宇佐郡駅館村上田貝塚、速見郡日出町大津遺跡等数例の遺跡が存在している。特にこれらの遺跡には口縁部に櫛目の波形文等（櫛状の施文具を上下させ乍ら横走させて波形の文様を施す）が現われ瀬戸内海を通じて畿内地方の彌生式文化と共通な点が認められる。この現象は彌生式後期になると、いつそう顕著にあらわれ、大分県大南町戸次ハンニヤ寺遺跡や、東国東郡安国寺遺跡等に於いて、櫛目文土器の特徴は一段と強化され、瀬戸内海様式とでも云うか、ある統制が考えられる。これは彌生式中期以降の部落社会の連合を意味し、更に畿内地方に直接関係づけられる点等から、大和国家の成立を意味するものであるかも知れない。

こうした土器の特徴によつて把握される当時の社会事情は古墳時代になるといつそう明確に大和国家統一への物的根拠が多くなつて来る。それは大和国家の貴族社会に流行すを高塚式古墳の地方への普及である。ともあれ、非常にローカルな彌生式前期の下城式土器に比して、中期以降の土器が次才に他の地域にと共通性を持ち、後期には瀬戸内海各地域と共同の文化的要素を持つに至つた経路は、個立的部落社会と部落連合体、更には統一的過程を示めすものであると見なして大した間違はないであろう。とに角農耕文化と、それによつて生じた富の蓄積とは大分県の先史社会を大きく変貌せしめた点で、彌生式文化と黎明期の文化と称することが出来よう。

原史時代

先史時代に対して原史時氏と云うのは一部には文献的資料にも関係して研究を必要とする古墳時氏を指すもので、大和国家の確立により貴族社会の連合政権による国家統治の時代を云うのである。即ち六世紀の仏教伝来によつて古墳が消滅するが、この時氏を下限として、彌生式文化の終末期である三世紀前葉を上限とする間の四世紀間を原史時氏と考えれば

良いと思う。

さてこの時代に於ける文化は古墳によつて検討されることを最大とするため、古墳の形態及び内部構造、副葬品等に就いて研究することにする。

一　古墳文化の発生

彌生式文化期の中頃、大甕を二つ合せて、人体埋葬の外部施設としたことは前にも述べたが、これは死者に対する思想的なことに起因するものである。この甕棺に盛土を行い、更に玉類や鏡等を副葬するようになれば、最早単なる家族墓としてではなく、族長的（貴族）墳墓と見られる。これは彌生式時代に積み重ねられた富による階級的なものと考えて差支えない。日田市吹上、宮ノ原附近に存する非常に沢山の甕棺中には、こうした族長的墳墓と見なすものが数例発見されている。又一方、平石を箱形に組合せた石棺が甕棺と併行して使用しているが、この場合は更に階級的なものが認められる。この箱式棺の内には豊後高田市大字美和、殿屋敷古墳や宇佐郡長洲町大字廟森の石棺より、銅剣や銅鉾が発見されるものもあり、最早や貴族墓と見なし得る有力な資料と云わざるを得ない。こうして大分県の曙期古墳の発生は北九州に次いで他の地方に先んじて発達したのである。

二　高塚式古墳の流行

三世紀から四世紀の初頭にかけて、畿内大和地方に於いては権力を象徴する高塚式古墳が作られ初めた。この高塚式古墳は中国大陸に発生したものであるが、畿内地方では独自な発達をなし、前方を祭壇式に平たくし、後方を円く盛土して、その中央に主体部たる人体埋葬の遺構を施している。前にも述べた如く、古墳は死者に対する思想的なものから出発したもので、これが権力の象徴として転用されたのである。しかして大和国家の発達にともない、地方の貴族も其の風習を模し、争つて高塚を築くことになつた。それは塚の大きさそのものが、貴族の勢力に比例されると云う程のものであつた。

さて古墳の築造にも時代によつて幾分変化があり、前期の古墳は形が、後円部に比して前方部が低く長く作られ、柄鏡形をなしている。これに対して中期の古墳は、前方部の高さが増し、更に後期になると前方部が一段と高さを増し恰も双子塚の形をなすに至る。この形の変化は幾分地方的な差はあるが、一般には、大和地方を軸として時代によつて同じような変化が認められるのを通常とする。この形の変化から、前期古墳の前方部は祭壇として、中期以降の高い前方部は陪家（殉葬）的性格をもつものであるかも知れない。現に中期以降の前方部にも石棺等が発見されている例が少くないから、当時殉死が流行していたと見ることは疑いないところであろう。この古墳の形の変化にともない、主体部（後円部の被葬

者埋葬位置）の構造にも時代によつて微細な変化がある。前期古墳は組合式石棺や石を割竹式に刳り所謂割竹式石棺等を主体部に安置し、鏡、玉等を副葬品としている。中期になると舟形石棺（石を舟形に刳り込み身と蓋を合せる）、長持形石棺（長持形に刳り込みをした身に、家形の蓋を合せる）等を主体部に安置して、鏡、玉、刀剣、櫛（竹製）等を副葬している。又この時期には横穴式石室を作り、家族墓（合葬）的性格をもつたものもあらわれてくる。後期の古墳には専ら横穴式石室が主体部の構造として流行されているが、石棺も家形石棺（身、蓋共に家形をかたどる）が多く作られている。この時代の副葬品は主に日常の用具を中心とするように変化する。これは石室内の黄泉国の夜長をつゝがなく暮して行くための現世の人達の配慮によるものと思われる。

さて大分県内には、合計千八百余[4]りの古墳が散在しているが、その内、前期の古墳と目されるものには先年発掘調査の行われた竹田市大字戸上の七ツ森古墳群、北海部郡坂ノ市町亀塚古墳、宇佐郡宇佐町大字高森赤塚古墳等があり、いずれも大和地方に於ける前期古墳と非常に良く似ている。七ツ森古墳からは碧玉製石釧（腕飾りの輪）が発見され、赤塚古墳からは「天王日月」と記銘の神獣鏡（鏡の内帯に神像と獣類が半肉刻されているもので、二神二獣、三神三獣、四神四獣等種々ある）五面が発見されている。この鏡は年代的に中国漢魏の間に製作されたものと推定されているが、遺物は伝世されるものであるからこれを以て古墳の築造年代を決定することは出来ない。しかし古墳の形、主体部の構造、遺物の種類等から四世紀前葉の築造になるものと見做して差支えないものと思う。又鏡からは、曾つて発掘された豊後高田市大字黒松の鑑堂古墳や、日田市日隈古墳より、それぞれ劉氏作竟の神人車馬画像鏡（中国漢魏の頃の画像石の画文に類似のもの）と、銅染作意の細線式獣帯鏡（細刻で獣形を内帯に半肉刻したもの）等が発見されて居り、後漢の頃と推定される遺物として注目されている。こうして見ると大分県の古墳が大和地方の前期古墳と同じ時代に築造されていることも考えられて興味深い。しかし古墳（高塚）が畿内地方を軸として地方に発達するところから見ると幾分時代的差のあることは確実である。

次に中期の古墳の代表的なものゝ中には、臼杵市稲田臼塚古墳や同市下山古墳、北海部郡神崎村築山古墳、宇佐郡四日市町鬼塚古墳、玖珠郡玖珠町千人塚古墳等がある。これらの古墳は舟形或は長持形石棺を主体に、一部には組合式石棺等の遺風も見られる。副葬品には、仿製鏡（日本で模製した鏡）や玉、具剣（貝で作つた腕輪）櫛等が見られ、これ又大和地方の中期古墳と非常に良く似た点が多く、大和国家との関連が注目される。

三　古墳の終末期

以上の前・中期の古墳に比較して後期の古墳は、主体部が主として横穴式で、羨道と玄室（死後の生活を営む奥室）からなる石室墳で、これは全県下に広い分布をなしている。中でも東国東郡安岐町大字塩谷の塚山古墳、別府市大字北石垣の鬼の岩屋古墳等は、その代表的なものである。これ等の横穴式石室の壁石には彩色、又は彫刻等によつて装飾[5]されたものがあり、其の構図は呪術（おまじない的文様）要素をもつたものが多い。しかし東国東郡伊美町鬼塚古墳の壁画の如く、現在の象徴画に通ずる構図をもつものもあり、洋画家間の話題となつている。丹や青色岩の粉末を使用して彩色された壁画の代表的なものは、日田郡五和村大字倉園穴観音古墳[6]や玖珠郡玖珠町大字小田鬼塚古墳等があり、彫刻によつて室内を装飾するものには、東国東郡伊美町大字中鬼塚古墳[7]や大分郡石城川村大字宮苑千代丸古墳[8]等がある。

これらの横穴古墳は家族墓的な性格を有するものであるが、更に家族墓的なものとして横穴（山腹の磨崖に横穴を掘るもの）古墳がある。これは一ケ所に群集するものが多く、大分市滝尾百穴、宇佐郡四日市町加賀山、鬼一手横穴群の如きは数十の横穴を有している。この横穴は、古墳時代末葉のもので、大化二年の薄葬令等による古墳の簡素化によつて出来たものであるかも知れない。こうして古墳は次第にその規模を縮少して行くが、中央に於ける仏教侵透等によつて完全に衰滅する迄四世紀余りの年月を要したものと推定される。大分県では奈良時代の遺物を伴う横穴もあるからこの風習は奈良時代にその下限が存すると見て良い。

こうした薄葬の傾向は中央でもそうであるが、大分県の平坦部に寺院が建立され、それにともつて火葬墓が流行するようになるといちじるしくなり、盛土や石室を作るために必要な労働力が寺院建立にふりむけられるようになつて来る。かくして一部に一般庶民墓として横穴が奈良時代迄残存するのに対して、社会の時流は仏教思想の発達と、それにともなう火葬墓へと発達して行つたのである。

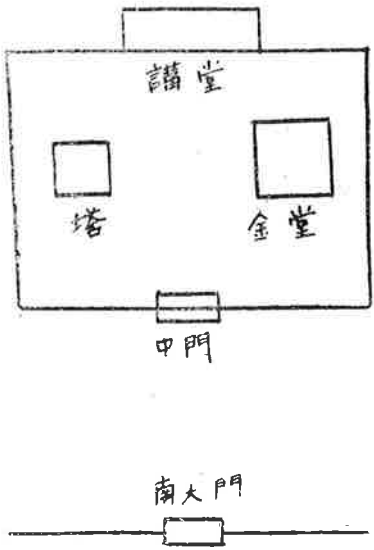
寺院の建立

高塚式古墳は、仏教伝来によつて終末となるのである。古墳の築造には家族労働を越えた多くの労働力を必要としたことは前に述べたとうりである。仏教の伝来にともないこの労働力は、大規模で壮麗な寺院建立にふりむけられたようである。それは平地に建立された広大な寺院に対して、人々は先史時代同様掘り立作りの竪穴や、平地住居等に住んでおり、あまりにも階級差が見られる。寺院の建立には特別な建築師によつて指導され、中国伝来の種々の工芸技術を尽した堂々たるものであつた。飛鳥時代には全国に四十六ケ所の寺院があつたと記されているが、大分県ではやゝ時代の下つた白鳳時代に豊前平野等を中心に相当数多くの寺院の建立が行われ

其の数は幾内大和に次ぐ盛況であつた。

一　奈良時代以前の豊前平野

中津市を中心とした豊前平野、宇佐神宮を中心とした宇佐平野には、古墳時代より文化が著しく発達したところであるが、飛鳥時代になり、大和地方に寺院が建立されるや、いち早くこの地方にも数多くの寺院が建立されるようになつた。これ等の寺跡の中で現在一番古いと思われるのは中津市相原廃寺である。これに次いで宇佐郡駅館村虚空蔵寺址、同法鏡寺址等で、これ等は法隆寺様式をもつ伽藍配置をなしている。塔、金堂、講堂、鐘楼、経蔵、僧坊、食堂、廻廊、門等の諸建築が一定の秩序を以て建立されている。この中、塔、金堂、講堂等の主要な建物は廻廊内に作られるのを常とし、相原廃寺、虚空蔵寺、法鏡寺等でも、廻廊内に左右に並んで建てられている。即ち塔は西に金堂は東に配置されている。この廻廊内は非常に広く、虚空蔵寺では約一町四方の広大な地をもつていた。これらの三つの白鳳時代の寺院で最も良く当時の面影をのこしているものは虚空蔵寺址である。虚空蔵寺址は、昭和二十九年六月、東京国立博物館考古部長石田茂作博士が中心となつて発掘調査を行つたが、其の結果、最も重要な塔（塔は仏舎利奉安の場所であるため、寺院では最も重要な位置に建てられる）が明らかにされた。これによると虚空蔵寺の塔は三十八尺の基壇（塔を建てる土台の土盛り）の上に一辺が十八尺（一辺に礎石四個を配しそれぞれの間を六尺の等間としている）の方形の基礎を作り、高さ八十尺の三重の塔が建てられていたことが明らかとなつた。中心になる心礎（塔の中心柱をさゝえる礎石）の刳込みは直径二尺で円形をなしているから、心柱の直径も略々二尺位であつたろうと考えられる。この塔より東約六十尺附近に金堂の趾も発見されたので、この寺院は法隆寺式の伽藍配置をもつていたことが知られた。中津市相原廃寺に於いても塔と、金堂の配置が虚空蔵寺址と同様であるし、法鏡寺址は、この附近より発見される瓦等が、全く虚空蔵寺址の瓦と同じであること等から、白鳳時代には豊前平野には数多くの法隆寺様式の寺院が建立されていたことが知られる。又これ等の寺院址が高麗



尺（曲尺の一尺が一尺一寸七分余の尺度）を規準にして建立されているところを見ると、この寺院の建立が白鳳時代であることが知られる。

天平時代と云えば大和地方には薬師寺を初め東大寺、大安寺等が次々に建立された時代であるが、宇佐平野にも宇佐神宮寺（彌勒寺）初め四日市廃寺等が造営された。これ等の寺院は東塔、西塔の二基が廻廊の外に中門のやゝ斜前方に配置され、廻廊内には金堂のみが存し、講堂は廻廊の北に配置されている。これは奈良東大寺様式を模したものと考えられる。

以上の如く白鳳時代から奈良時代にかけて豊前平野には沢山の寺院が建立され、この附近には条理（大化改新の際に施行された地割りで、基盤目のように整然としている。この基盤目は一坪と呼ばれ、六〇間四方で一町で、方六町、三十六箇坪で里とする）が施行される等、当時の豊前平野は一つの都市であつた。又大分市南方にも奈良時代の寺院が数多く建立され、大分郡大分村豊後国分寺を初め大分市永興寺、同金剛宝戒寺等は其の代表的なものであるが、どのような伽藍配置をなしていたか、推定の域を出ない現状である。兎角現在大分県で確認されている奈良時代以前の寺院址は全部で九ケ所で、その分布は左の如くである。

(一)　豊前平野に存在するもの

1. 中津市大字相原　相原廃寺　飛鳥末期
2. 宇佐郡駅館村大字山本　虚空蔵寺址　白鳳時代
3. 宇佐郡駅館村大字法鏡寺　法鏡寺址　白鳳時代
4. 宇佐郡四日市町大字四日市　四日市廃寺　奈良時代
5. 宇佐郡北馬城村大字日足　彌勒寺（初建）　〃
6. 宇佐郡宇佐町宇佐神宮内　彌勒寺址　〃

(二)　大分市南方の平地

7. 大分郡大分村大字国分　国分寺址　奈良時代
8. 大分市大字永興　永興寺址　〃
9. 大分市大字南大分　金剛宝戒寺址　〃

この他、臼杵地方に一ケ所、豊前平野に二ケ所等、位置の明らかでないものが存在している。尚、豊前平野で福岡県に属する地方には相当数の寺院址があり、この地方を含めた広い意味の東九州（豊前、豊後）には大和地方に次ぐ数多くの寺院が建立され、当時の盛況を物語つている。

二　火葬のはじまり

日本で最初に火葬がおこなわれたのは天武天皇四年、僧道昭を火葬[9]にふしたことに起源すると云われている。然し事実は更に古くから行われていたことは確実に推定できる。この火葬墳は古墳時代の厚葬が次第に薄葬思想への傾向をたどる社会事情に歩調をあわせて、初めは僧侶間にそして次第に一

般社会人に広められて行つたものと考えられる。考古学上この火葬の遺風を残すものとして火葬骨を蔵する容器が埋存することがある。大分県では宇佐郡駅館村の虚空蔵寺附近の山林中や東国東郡安岐町附近からこの蔵骨器が発見されているが、容器として須恵器（古墳時代末期に使用された灰白色硬質の土器）を使用して居り、容器から古墳時代に直結する時代と考えられ、少くとも白鳳時代か奈良時代のものと推定されている。

三　塼佛、瓦の発達

塼仏（粘土で作つた仏像で、これを寺院等の壁にタイル状に貼り付けたもの）は、中国大陸等の石窟寺（石を刳りぬいて作つた寺院）の壁石に作られた仏像を模したものと推定される。太和地方では白鳳時代に盛んに寺院の壁面等にも置され、信仰の対象や装飾とすることが流行した。大分県では虚空蔵寺址の調査に於いて破片を含めて七十個ばかりの塼仏が発見されたが、それは、説法釈迦を牛肉刻りしたもので、後背に蓮花瑞雲を散らした見事なもので、大和地方の斑鳩にある南法華寺の塼仏と寸分も変りないものである。又これは法隆寺の水十壁画とも構図の点で類似して居り、大和地方と大分県は上代文化の交流が非常に盛んであつたことを示すものである。又この彼我の交流の盛なことは、虚空蔵寺初め法鏡寺等から発見される法隆寺式忍冬唐草文軒平瓦によつても推察出来る。即ち瓦の芯の文様としハート形の内輪と蝙蝠形の外輪を描き、この中心飾より左右に蔓草を派生せしめ、この蔓草には節をもうけている。こうした法隆寺式軒平瓦は宇佐郡内に散在する奈良時代以前の古瓦として相当発見されている。これは寺院建立が大和地方の工人によつて行われたことを示めす貴重な資料と云うことが出来る。然し宇佐神宮寺として建立された彌勒寺址からは、ハート形のみの中心飾に節のない唐草を左右に配した所謂都府楼瓦（太宰府に使用された瓦）が発見され、奈良時代には九州の中心が太宰府に移り、その地の工人が彌勒寺の建立にあたつたこと等も推定されて、当時の文化の推移が、時の政治的流れに深い関係をもつていたことが知られる。然し太宰府の古瓦にも大和大官寺等に極似するものもあるので、太宰府と大和との交流は非常に盛んであつたろうし、宇佐地方も其の中継地として大いに盛んであつたろうから、奈良時代の

1 相原弊寺　2 虚空蔵寺址　3 弥勒寺
（大分県の古瓦）

宇佐地方の文化が幾内地方と無関係であつたとは云えない。其の他軒丸瓦等も大和法隆寺、同藤原宮址、同経寺址、同唐招提寺等の複弁瓦に極似しているので、この点からも古代大和地方と、この地の文物の交流の盛況を物語るものである。

おわりに

以上、大分県の太古から奈良時代にかけて、主として考古学的問題を取り上げて資料とし、極く簡単に概説して見た。紙数の関係もあつて、いちいち明確に資料の解説が出来ない点も数多くあり、御不満の点も多いと思うが、精細な解説はいずれ機会を見て行うことにする。尚、考古学的資料として仏教関係の問題があるが、これは又本講座の一部として後にゆずることにする。いずれにしても各地の資料をあげられなかつた点を残念に思うが止むを得ない。大分県の古代文化を研究する人達の何かの役に立てば幸いである。

註

①辻坂輝彌氏「黄島貝塚及び宮脇遺跡の日本新石器時代に於ける編年的位置に就いて」―吉備考古―七八、七九合併号（瀬戸内海の押型文を包含する貝塚の貝類が、淡水産のもので、これより帰納して当時は瀬戸内海に海侵の完了する以前とする意見が述べられている）

②杉原荘介氏「遠賀川」。

③拙稿「豊後国佐伯市下城弥生式遺跡の研究」。

④昭和二六年日本考古学協会に於て、京都大学梅原末治博士担当の日本古墳文化表面分布調査。大分県内の調査を賀川が担当し全県下の古墳千八百二十五基を調査した。

⑤拙稿「東九州に於ける装飾古墳」―別府大学紀要―第三輯。

⑥白名子太郎氏「穴観音古墳」―大分県史蹟名勝天然紀念物調査報告―第五輯。

拙稿「大分県四日市近郊の装飾古墳」―考古学雑誌―三七巻。

拙稿「伊美町鬼塚古墳」―大分県文化財調査報告―第二輯。

⑧本荘昇氏「千代丸古墳」―大分県史蹟名勝天然紀念物調査報告」第五輯。

⑨「続日本紀」文武天皇紀。

（別府大学文学部助教授）

郷土史料

大分府下における「鬼」の字のつく古墳

下毛郡東谷村（鬼の洞）　北海部郡坂ノ市町（同）
同　尾津民谷（鬼の塚）　東国東郡来浦（鬼のいわや）
同　尾紀村（鬼塚）　直入郡菅生村（同）
宇佐郡四日市町（同）　別府市石垣（同）
東国東郡伊美村（同）　大分郡田布院町（同）
西国東郡高田町（同）　玖珠郡森町（同）
大分郡東種田村（同）　西国東郡高田町（雷鬼の岩屋）

（富来隆）